チートがログインしました

究極の混沌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チートがログインしました

【Ｎコード】
Ｎ７９５３Ｓ

【作者名】
究極の混沌

【あらすじ】
どこにでもいる普通の学生。その少年がある神に転生させてもらう話

プロローグ

「ここどこだ？」
知らない天井どころか天井がない。
「おっす」
「ほわぁ！？」
「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・あんた誰。」
「あ～俺？素戔嗚だけど？」
は？スサノオってあのスサノオか？
「スサノオって言ったらそのスサノオしかいないと思うよ。」
心読むな。て言うか軽いなおい。あんた結構上位の神だろ。爺口調じゃないの？
「長生きするとじじくさいのが嫌になるからね」
なるほど
「そろそろ本題にはいるぞ。おまえさんは死んだ」
まあ、走馬灯が見えたし目線が赤かったし、あれ絶対血だな。それはそうと、
「あの時助けた男の子はどうなった？」
「君のおかげで命は助かったよ。」
よかった。あれでしんでたら俺無駄死にじゃん。
「んん、でその勇気に免じておまえさんを転生させてやることにした。あ、転移でもいいぞ。」
テンプレですか。
「で、どの世界にするんだ？」
なんかリストみたいなものを出してきた。・・・・・・ふむ
「じゃあ恋姫で」
「了解。能力とかはどうする？」
そう来たか。

「いくつまで？」
「いくつでも問題ない」
「サラサラっとこれ大丈夫？」
「えっとなになに？
「ありとあらゆるものを創造する程度の能力」
その他東方の能力
身体能力が呂布の１０倍
ｆａｔｅの宝具
アラガミ化
・・・・・・・・・・うわ、チートだな。」

「で、行けるの？」
「ん、モーマンタイ。」
「じゃあ、あとは転生で」
「ホイホイっと、じゃ行ってらっしゃーい」
すると足元に黒い穴が開き、
「先にいえええええええええ」

あ、やっちまった

「さてと、あいつの体の設定をしますか」

こんにちは、前回の神です。これからあいつのステータスをいじくるわけですが、

「えっと、これとこれと・・・あ、これもか」

という感じでステータスなどがかかれた札をとる。
あとはこれを、
ペタペタ・・・・・ハラリ、ペタッ

「あ！？」

なんかはいった！？えーと、「鬼巫女１２ｐ」・・・・・は？
あり得ないチートと化してしまった。　どうしよ。（一度張った札は取れません）

「・・・・説明したら大丈夫か。」

別にデメリットがある訳でもないし。これで終わり。

「あとは、この体を転送すれば完了だな。」
ブンッ！

said　　？？？？

「うーん、ついたのか？」
あれ？なんでしゃべれんだ？ふつう赤ん坊はしゃべれないんだと思うけど。
ってあれ？

「これ3歳くらいの体じゃん」

あとなんで箱に入ってんだ？えっと・・・・・「拾ってください」

「・・・・・・・・・・・・・・・え？」

捨てられてるうううううううううううう！？
「まじか！？どんなてんかいだよちくしょおおおおおおおおお！！！！！！！！」

一人の少年の叫びが空に消えた

主人公紹介

性　終　名　天　字　始創

真名　死帰《しき》

東方の能力と宝具、荒神化をもらった。
トラブルにより、スペックなどが鬼巫女化。もはや無敵になってしまった。
そのせいか容姿が男なのに霊夢よりになってしまった。男の娘。右目だけ赤黒い色になった。
髪をのばすと女にみられることがしばしば。
めんどくさがりだがやることはしっかりやる。

筋力　ＥＸ
霊力・氣・魔力・など　∞
耐久　ＥＸ
頭脳　Ｂ
運　　Ｓ
宝具　ＥＸ（宝具のランクは全部ＥＸになる）

スキル
創造（能力）ＥＸ
生物だろうとメカだろうと世界だろと創ることができる。

鬼巫女化　ｊｓｈふゅｗじぇｊんｄ（計測不可）
文字どうり鬼巫女となる。性格とか。
ひたすらスペカと弾幕を乱発する。滅多に発動しない。

フラグ　？
作者しだい

隠密ＥＸ
本気を出せばだれも気ずくことができない。

アラガミ化　ＥＸ
完全にオラクル細胞を掌握。全身アラガミ化しても意識が乗っ取られることがない

主人公紹介（後書き）

やりすぎたかな？

チート炸裂（前書き）

死婦「作者あああああ、どんな展開だこれは」
作者「だって幼少期とかめんどいし」
死「いくらなんでもあの扱いはひどくね！？」
作「おまえに人権などない」
死「理不尽だあああああああああ」

チート炸裂

どうしよ、この中途半端な体でどうしろというんだ。ｏｒｚ

「ん？なんだこの紙。」

―体の設定に間違えて鬼巫女１２ｐのスペックとかが紛れちゃった☆すまん。
あと服はお前が好きなのにしたから勘弁な

素戔嗚より―

「・・・・・まじかよ。」

ただでさえチートなのにテラチートに進化しちまったよ。そういえば今着てる服って？？機関の服じゃん。やったー。っと

「とりあえずその辺をほつき歩いてみるか。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「なぜこうなった」

いまおれは大勢の賊に囲まれている。

なぜかって？それはこうだ

歩く

←

賊に見つかる
←
フルボッコ
←
オボエテヤガレー
←
現在

「てめーさっきはよくもやってくれたな？」
「元はと言えばそっちから突っかかってきたんだろ。」
「うるせえ！持ち物全部おいていくならまだ許してやるが？」
「なんでお前みたいなカスに持ち物やらにゃいかんのだこの屑」
「〜〜っ！もう我慢ならねえ！！お前らやっちまえ。」

オオォォォォォォォ――――――――――――

どうせだし力の確認してみるか。
「いいぜ、こいよ！」

「どらぁぁぁぁぁ」
ブオン！！　ゴシャあああああ

「「「「「「「「「ぎゃあああああああああああああ」」」」」」」」」

「弱い弱い！」
「ヒ、ヒィィィィィ」
「逃がすかあああああ」
俺はオラクル細胞で腕を伸ばし、逃げたやつの足をつかんで投げ飛ばす。

「にしても賊は雑魚の集まりかぁ？」
弱すぎる。これでは練習にもならん。
賊はというと、散るじりになって逃げている。
「はあ、もういいや。これで終わりだ。」

魔神「死狂い」

死帰がそういった途端辺りに赤黒い線が走ったと思うと、そこには死帰と首のない死体が血飛沫をあげて転がっていた。

「原作までまだ何年もかかるだろうしな～」
そうだ。いいことを思いついた。

「月に行ってＡＫでも創るか。」
俺の能力さえあれば生命体でも大丈夫。できればＮＥＯＳＵもつくっとくか。衛星砲とか便利だし。
そもそもＡＫに勝てるやついるのか？もうカテゴリーＧが一匹いるだけで大陸滅ぼせるかもしれんな。
「とりあえずやることも決まったし行動に移すか」

チート炸裂（後書き）

死「さすがに鬼巫女はないんじゃないか？」
作「いいじゃん好きなんだから。二番目に。」
死「一番は？」
作「ＵＳＣこと風見幽香さんだ！」
死「マニアックなところに来たなオイ」
作「そんなの人の勝手だろーがぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

月面都市　もう恋姫の世界から外れてるな・・・・（前書き）

作「やっちゃった」
死「やっちゃったですまないだろこれ・・・・」

月面都市　もう恋姫の世界から外れてるな・・・・

ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

ゴアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

「静かにしろ。」

「「「「「「「「「・・・・・・・・・・・・・・」」」」」」」」」

「おーいボス。ようやく？ができたぞ」

「おお、やっとか」

こんにちは死帰です。いまおれは月の地球側にいます。前回いったようにいろいろしてました。

エイクリッド（ＡＫ）作ったり、衛星砲作ったり、プラズマ兵器作ったり・・・・・

正直やりすぎた。

「そろそろ降りるか。」

あれからもう２３年。俺も大人になった。身長もかなりのびたぜ！

まあ、んなことは置いといて。

「大気圏突入用ＶＳよ～い」

「「「「「「おおーーーーーーー」」」」」」　ちなみに今返事したのは俺の部下（創造した）

５０人くらいで将はうち５人だ。紹介はあとにしよう。

「行くぞ野郎ども！！！」

「リーダーに続け―」

ドン！　　ヒュンヒュンヒュンヒュン

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

・・・・・・

「はーはっはっはーーーーーーーーーーー！地球よ、私は帰ってきた！」

「何やってんすかリーダー」

「いいだろう？閃。おれにとっては数年ぶりの故郷なんだし」

「俺らは初めてですけどね」

「そだな。そういえばもう転送したか？」

「ＶＳならちゃんとＮＥＯＳＵに転送しました」

「全員ガンソードとロケラン持ったか？」

「バスターグレネードもばっちりっす」

「よし、じゃその辺のぞくを見つけて惨殺するぞ～」

「「「「「「なにげなくエグイこと言ってるよこの人！？」」」」」」

「レッツゴー――――」

合言葉はヒャッハ――――――（前書き）

死「どんなタイトルだよｏｒｚ」

合言葉はヒャッハ――――

「全然賊が見当たらんなー」
「いたら居たでどうするんですか」
「消毒（抹殺）するだけだ」
（だめだこの人早く何とかしないと）

「「「「「「「ひゃッは――――――――――――――――！！！！！！！」」」」」」」

「ファストレイに乗ったらなんであぁなるんだ？」
「それは謎ですね」
うちの兵士はあれに乗るとテンションMAXになる。聞いたらなんだか言いたくなったらしい。
謎だ・・・・・

「・・・・・ん？あれは村か。煙立ってるけど」
「賊じゃないんですか？」
「あ。」
（大丈夫かこの人・・・・）

「とにかくあっちに全速前進！」

ヒャッハ――――――――――――

（（・・・・・・うるさい・・・））

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

「女子供は生け捕りにしろー、男は殺せー」

オオオオオオォォォォォォォォォォォ

村は炎に包まれ村人は逃げ惑っていたり賊につかまっている者もいる。

「頭！何か近ずいてきます。」

「あ？」

ヒャッハ――――――――――――

んだありゃあ？

「汚物は爆殺だーーーーーー！打て打て、打ちまくれ！！」

ズドン　ズドン　ズドン

「ぎゃあああああ」

「な、なんだ！？」

何が起こった！？いきなり味方が爆発したぞ！？
くそ！なんなんだあいつら。っていうか空飛んでね！？

ｓｉｄｅ死帰

「汚物は爆殺だ――――――！打て打て、打ちまくれ！！」
次々に部下がロケランをぶっ放す。
「ヒャッハ――――――――」

・・・・・やっぱ少しうっさいな

そんなことを思いつつグレネードをばらまき続ける俺。それにしても数だけは居るんだな。頭つぶしたほうが早いか・・・・

「リーダー」
「なんだ？閃」
「あれじゃないのか」

閃が指すほうにはほかのやつらになんか言っているのがいる。

「う～ん、確かめるか。」
そのほうが早い

「おいあんた」
「なんだ？」
「お前が頭か？」「だったら？」

「殺す」　「やれるもんならやってみな！」
と、俺に切りかかってくるが、
バキン
おれは剣を叩き割る
「な！？」
「死ね！」
と言い、頭の体を食いちぎった。　まず。
「お～い、おわったか？」
「殲滅完了です」
「じゃあたいさｎ「あの～」ん？どうかしましたか？」
「賊を退治してくれてありがとうございます。」
「いいって、それじゃ。」
「あ・・・」

「で、この先どうするんすか？」
「とりあえず、おまえらいったん月に戻れ。」
「は？」
「ピンチの時だけ呼ぶから。」
「いや、なぜに？」

「あんまぞろぞろ居たら目立つし、だれが都市のメンテナンスするんだよ。」
「はぁ～。わかりましたけど、むりしないでくださいよ？」
「無理☆」
「・・・・・・・・・・・・まあ、そういうと思いましたけど・・・・・」

それでみんなは俺のスキマに入っていく。

「仕事サボんなよ～」
「わかってます」

全員入ったのを確認するとスキマを閉じた。

「じゃあ、董卓のいる洛陽に行きますか。」

再びスキマを開き、あるものを出す。

「持っててよかった列車砲～♪」

ガキン　ゴトンゴトンゴトン

レッツラゴー

合言葉はヒャッハ――――――（後書き）

めちゃくちゃ

到着

ゴトンゴトンゴトン

まだかな～もうっこう経ったんだけど、

ピピッ　　ん？城か。

どうやら賊が籠ってるらしいな。進路的にも邪魔だしぶっ飛ばすか。

「ふっふっふ。久々に俺の列車砲が火を噴くぜ！」

ガシャン　　徹甲弾「激怒」装填完了

「標準よし、チャージ完了。　ファイヤアアアアアアアアアアアア」

ドコ――――――――――――――――――――ン！！！！！

SIDE孫策

「ねえ、冥琳「だめだ。」まだ何も言ってないんだけど・・・・」

「どうせ出陣したいとかいうんだろう？」

「うっ。」

「はぁ～おまえはもう少し王としての自覚を持て」

「ぶ～ぶ～、冥琳のケチ～」

「思いのほかなかなか墜ちないな。」

無視された・・・・・・・・
そう思っていたら、
「ファイヤアアアアアアアアア」
ドゴ――――――――――――――ン
「っ！？な、なに！？」
突如城が爆発し、煙を上げた。　そして煙が晴れたところには、
「え、うそ・・・・・・」
城が木端微塵になっていた。おそらくあの爆発では生き残りは居ないだろうけど。
すると
ゴトンゴトンゴトンゴトン
何かがすごい速さで城があったところを通り過ぎて行った。
そのとき、「ザマァァァァァｗｗｗｗｗｗｗ」
と聞こえたけど、ザマアってなに？
「なんだったの？」
「私にもわからん」
ｓｉｄｅ死帰
城は木端微塵になった。俺はというと
「ザマアァァァァァァァァァァｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ。俺の進路上

にいるからそうなんだよｗｗｗ」
列車砲の上で腹を押さえてバカうけしてた。
ピピっ

「リーダー、もしかして列車砲使った？」
「もしかしなくても使った。」
「やっぱり？こっちからも光が見えたからね。」
列車砲半端ねえ
「ふつうこういうのって隠しておくものじゃない？」
「別に最終兵器でもないし平気平気。」
「まあいいけどあんま使いすぎないでね。メンテすんのこっちなんだから」
「善処する」
(絶対しないなこの人)

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・

お、やっと見えてきた。へえ、なかなかでかいな。
「さてさて、どうなるかな？」

仕官　遭遇

「来たのはいいがどうしよう」
ただいま絶賛迷子中の死帰です。
ついたのはいいけどどこに行ったらいいのかわからないというバカげた状態になっています。

「とりあえず腹ごしらえ・・・・ん、あんなところに肉まんが。」
言い忘れたが俺は肉まんが大好きだ。（リアルも）まあ、一番はラーメンだが。

「おやじ、肉まん２０個くれ。」

「あいよ」

金？能力で作れるから億っ千万である。
うん、うまい。

クイックイッ

「ん？」

なにか引っ張られたので、引っ張られた方を見ると、

ジ～～～～～

俺の肉まんを見つめている赤髪の女の子がいた。と言うかこいつ呂布じゃないのか？

「・・・・・・・いるか？」

コクコク

「モッキュモッキュ」

和む・・・・・・・　クイックイッ　ん？

「もっとか？」

「・・・・うん」

「ほれ」

「モッキュモッキュ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

・・・・・

結局全部食われた。すごい大食いだなおい。

「そういえば、城にはどう行けばいいかわかるか？」

「・・・なんで？」

「ああ、仕官しに来たんだけど道がわからないんだ。」

「・・・・・・こっち。」

「あんがとな。俺は終天、字は始創だ。」

「・・・呂布、字は奉先。」

「そっか。なあ呂布「恋。」・・・・それは真名じゃないのか？」

「始創いい人・・・・だからいい。」

肉まんやっただけなんだけど。

「わかった。俺の真名は死帰だ。んで、聞きたいんだが董卓ってどんな奴なんだ？」

「月いい人・・・・・」

やっぱりそうか。まあ、恋姫の世界だし実際の歴史とはちがうわな。

「着いた・・・・」

おお、でかい。

恋と一緒に城に入っていくと、

「ちんきゅ～～～～～・・・・」

ん？

「き――――――っく！！！」

ひょい　ガシ！

「は、はなすです！」

「お前からきたんだろが」

「ちんきゅ・・・・だめ」

「恋殿～～」

つかあの蹴りかなり危ないんだが、普通の人なら大けがするような・・・・

「ふーんあんたがうちに仕官したいって人？」

現在俺は面接的なことをさせられている。いや、面接じゃないか。

「あんた、武官と文官のどっちの方が得意？」

「ん～、俺あんま頭よくないから武官だな。」

文官とか絶対無理

「そう、じゃあとりあえず家の将と戦ってもらうんだけど・・・」

「それなら私にやらせろ！」

いつの間にか部屋に銀髪の女の子がいた。

「あら華雄、そうねじゃあ始創、鍛練場にいって華雄と戦ってもらえるかしら？そのあとに合格かどうかを言うから」

普通に考えたら負けると失格だよな。

「わかった。」

「それじゃあ、鍛練場に行くか。」

仕官　遭遇　（後書き）

しゃべり方難しい

主人公紹介２（前書き）

ここでは前回の紹介で書き忘れたことや追加要素を書いていきます

主人公紹介２

右目が赤と黒で目立つので、普段は？と彫られた眼帯をつけている。
（白目の所が黒で黒目の所が赤い）

使用武器（一騎打ちなどのとき）
崩天画戟《ほうてんがげき》
刃の色が黒く、真ん中の刃だけ少し長い。重さが異常で１ｔある。

大太刀　正宗
ＦＦ？のアーロンが使う七望の武器（最強の武器）
刃が特殊な形をしている。体力が少ないほどに力が上がる。

特殊

ＡＫ化
持っているスキル中最も強力で危険な能力。
実験中のトラブルにより、体内にＡＫのコアが入ってしまった。
これを使うと意識がほとんど持って行かれてしまうため制御が極めて難しい。
その上、寿命を少し縮めてしまう。

ＡＫ化中は心臓部がコアとなり体の強度がダイヤ並に変化するので
基本的にこの時代の技術ではこれを突破する方法はない。

圧倒的な手合せ（前書き）

呂布の字間違えた。

圧倒的な手合せ

また迷っては元も子もないのでおれは賈駆たちについて行った。
すると、鍛練場についたところに董卓軍の武将の面々がいた。
(面々とは言っても、２・３人しかいないが。)
「ふ~ん、あんたが恋が連れてきたって奴か。」
「あんた誰だ?」
「うちは張遼、字は文遠や。あ、できれば敬語とかはやめてな?堅苦しいのとかうち苦手やから。」
「わかった。おれは終天、字は始創だ。よろしく。」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
「それじゃあ、始めてもらうわね。」
「いいぞ「ちょっと待て。」・・・なんだ?」

「お前武器はないのか？」

「あ、あ～今出すから待ってくれ。」

グパァ　ごそごそ　たしかこの辺に・・・あった。　スキマから
ズズッと俺は崩天画戟をとりだす

「っと、いいぞってどうした幽霊でも見たような顔して・・・・」

恋は、ぼ～っとしているがそれ以外のみんなは目が丸くなっている

「・・・・・・・・・・・」

「おい、いいか？」

「・・・・・はっ。あ、ああでは始めるとしよう。」

そういって華雄は構える。俺はと言うと、

「構えないのか？」

「あいにく俺には構えがなくてね。いわばこの状態が構えともいえる」

「まあいい、ではいくぞ！」

「来い！！」

華雄は自分の武器である大斧を振り回してくる

ブンブン　ヒョイヒョイ

華雄の猛攻を軽々とかわしていく。

「くっ」

「どしたどした？そんな大振りじゃ俺には届かんぞ？」

「うるさい！」

ん、これは当たるか。

ヒュ、ガキン！

「「「な！？」」」

「！？・・・・」

「さすがに武将だけあってなかなかの威力だ。」

おれはその一撃を素手で受け止めた。

そして俺はその斧をはなし、

「今度はこちらの番だ。」

おれは崩天画戟を持ち直し、華雄に向ける。

「ふっ」

ヒュオン　　ズガン！！！！

「ぐっ」

ガガッガガガガッガガ

俺は次々に攻撃を叩き込む。実は手加減してだが。本気でぶち込んだら呂布でなけりゃ一撃で腕がいかれるだろう。俺の本気はそれだけの力がある。

「終わりだ。」

次の瞬間華雄が握っているはずの大斧空に舞っていた。

ヒュンヒュン・・・・・ザクッ

「俺の勝ちだな。」

俺は華雄の首に刃を当てて言う

「・・・・そのようだな。」

「まさか勝っちゃうなんてね。合格よ。特に文句もないしね」

「そうか。あ～よかった」

まあ、とりあえず合格したようだな。

「いや～あんたつよいな～」

「そこまで強くないよ。」

「謙虚やな、なあ恋。・・・・恋？」

なんでこっちをじっと見る。なんか嫌な予感・・・・。

「死帰、恋と戦って。」

当たったし・・・・・

「いいぜ、別に。そこまで疲れてないしな。」

「大丈夫なんか？」

「まあ見てなって。」

さて、三国最強がいかなるものか見せてもらいますか

圧倒的な手合せ（後書き）

うまくかけない。

最強ＶＳ異端なチート（前書き）

死「フラグたてやっがた！？」
作「いいだろ別に。仮にもハーレムって書いたんだから」
死「そういえばそうだったな。」

最強ＶＳ異端なチート

「二人とも準備はええか？」

「いける」

「こっちもいいぞ。」

前回恋に手合せを申し込まれてしまった死帰です。まあ三国最強ってどれくらいか知っておきたかったからちょうどよかった。

「それじゃあ始め！」

「・・・・・・・・」

へえ、隙が全然ない。さすがは最強、やるな～。

「あの二人全然動かないんだけど・・・」

「あれは動かないんじゃなくて動けないんや。」

「お互いに隙がない。不用意に動くと叩かれる。」

わかってるようだな。このままじゃ埒があかないし仕掛けるか。

「は！」

ドン！ガキン！
おれは思い切り地面を蹴り、一気に迫る。そして、それを恋が受け止める。
キン！
恋がそれを払い、突いてくる。
「ふっ」
ヒュン！ガッ！
俺ははじかれた崩天画戟をそのまま勢いに任せ、体を一回転し受け止める。
尚も恋は突きを放ってくる。
ガキ！　ギャリン！　ガツン！
俺はそれを止めたり、逸らしたりして防いだ。
（華雄とは比べものにならんな）
そんなことを思いながら突きをさばいていく。
「・・そこ！」
気がそれていたせいで重心が逸れてしまい、そこをたたきに来た。
しかし、

「それでは俺は倒せねえ！」

俺は、振り下ろされる方点画戟を横に避け、崩天を振り上げる。

「おらあああぁぁぁぁぁ！！！！」

「！？・・・・グッ」

それを受け止めた恋の体が上に吹き飛ぶ。
そして、俺はそれよりもっと高く飛び

「とどめだ！」

ー堕天撃ー
下に叩き落とす。

ドガアア！

「ウグッ」

かなりの速さで下に落ちていく恋。

（・・・・！？しまった。あれでは無事じゃすまない）

自分の失態を悔やみながら俺は恋の下に『距離を操る程度の能力』で一瞬で移動する。

ひゅうーーーーーーー・・・・・ボスン！

キャッチ成功。

「大丈夫か？」

「うん」

「そりゃよかった」（ニコッ）

「／／／／／／／」

「ん？どした？」

「な、なんでもない・・・・・／／／」

「顔真っ赤だけど・・・・・」

「なんでもない」

「そ、そうか。ならいいんだが。」

マジでどうしたんだ？耳の先まで真っ赤なんだが。まあ、本人が言うんだから大丈夫だろ。

最強ＶＳ異端なチート（後書き）

死「作者あぁぁぁぁぁ！！！歯ぁ食いしばれやぁぁぁぁぁぁ！！！！」

作者「え？ちょっ」

死「神槍『スピア・ザ・グングニル』！！！」

作者「ギャアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！」

ピンクの悪魔って攻撃がえげつないよね（前書き）

注※　これから先、作者のきまぐれにより設定が変わることが偶にあるかもしれません。そのへんをご了承ください。

ピンクの悪魔って攻撃がえげつないよね

呂布との手合わせから数ヶ月経った。自己紹介とか面倒なので割愛する。

霧「死帰～、勝負やーーーー！」

死「嫌だ～～～～～～」

いま霧から逃走中だ。以前戦った時からしつこくしかけてくるようになった。ちなみに俺の圧勝だった。

そんなある日、

死「なあ詠」

詠「ん？どうしたの死帰。」　（賈駆）

死「ちょっと何日か出かけるから。」

詠「ふ～ん。・・・・え、なんで！？」

死「ちょいと族を狩りに。」

詠「・・・ま、まあいいけど。」

死「じゃあ行ってくるわ。」

詠「行ってらっしゃい」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

恋「死帰、どこかいくの？」

死「恋か、ああ、すこしな。」

そう答えると少し恋の顔が落ち込んでるように見えたので、

ナデナデ

恋「ん・・・・・／／／／」

撫でてやると気持ちよさそうにめを細めた。

死「大丈夫だ。すぐ帰ってくる。」

恋「わかった・・・」

死「行ってくる。」
恋「行ってらっしゃい」

さて、ポチっとな。
ピピッ
「は～い。こちら天だよ～。」
「久しぶりだな天。」
「あ～、リ～ダ～だ～。ひさしぶり～」
相変わらずおっとりとした喋り方だ。
「早速なんだが、いつでも衛星砲が撃てるようにしてくれないか。」
「少し時間がかかるよ～？」
「構わん。」
「りょうか～い」
プチン
それだけ聞くと通信をきった。

「保険もかけたし行くか。」

キング・クリムゾン　時間が消し飛ぶ

洛陽を出て五日が過ぎた。
「カ～ビぃ～ほ～し～のタ～ンバリ～ン・・・」
おれは某ピンクの悪魔のアニメＯＰを歌っていた。あれ結構好きだったんだけど。新作が発売中止になったとき「巫山戯るなーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！」とブチギレた。幼い頃からカービィをバカみたいにやってきたのでその事実を知ったときドラえ◯んの地球破壊爆弾を使ってやろうかと思った。

「ん？あれは街か？」

ひたすら歩いていくと街らしきものが見えた。
「食料も少ないし行ってみるか。」
俺はそこに向かうことで面倒なことになるとは知らずに俺は進んだ

えーりんえーりんやりすぎて筋肉痛になったらどう思います？（前書き）

学校が忙しくてなかなか投稿できませんでした。あとテストまで一週間・・・・ヤヴァイ。

えーりんえーりんやりすぎて筋肉痛になったらどう思います？

「えーりんえーりん助けて～今日もきーこえてくる～？」

おれはヘルプミーえーりんを歌いながら村に向かっていた。目的は食料補給だ。半月分あったのに食いすぎて5日で消えた。

で、村についたけど

「ひとがいない？」

かなり広いんだがぜんぜん人がいない。廃村か？

それを確かめるためにとりあえず歩き回ってみたら、

少女「そこのおまえ、とまれ！」

死「あ？」

後ろから呼び止める声が聞こえたので振り向いたら銀髪の少女が臨戦態勢でいた。いきなり危ないな。

少女「おまえ村の人ではないな。何者だ！？」

死「俺か？俺は死k「凪ちゃ～ん！待つの～！」「待つんや凪！」ん？」

聞かれたので答えようとしたら後ろから二人の少女がこちらに走ってくる。この銀髪の子の知り合いか？

少女B「凪ちゃん。その人は賊じゃないと思うの～」

少女C「黄色い布まいとらんしな。ちょっと怪しいけど・・・・」

まあ、黒コートって何気に怪しいもんな・・・・

するとさっきの銀髪の少女が頭を下げてきた。

少女「すいません、あいつらの仲間だと思ったもので・・・・」

黄色いずきんってことは黄巾党か。まあいいけど。

死「誤解が解けたなら別にいい。特に怒ってないしな。」

少女B「よかったの～」

少女C「そういえばお兄さん誰や？」

んなことよりも俺は君が持ってるものに驚きだよ。なんでこの時代にドリルがあんだよ！？

死「俺は終天。董卓軍の蒋だ」

楽「私は楽進と申します」

于「沙和は于禁なの～」

李「ウチは李典や。それにしてもお兄さん将軍だったんやな～」

死「ちょっとそのへんをうろついてただけだ。あと聞きたかったんだがなんでこの村全然人がいないんだ？」

楽「ああ、それですか。実はもうすぐ黄巾党がせめて来るのです。だから、みんな奥の方にいます」

ああ、避難ね。

李「せやからお兄さん早う逃げたほうがいいで？」

死「う～ん、俺も戦うわ。」

「「「え！？」」」

そんな驚かなくても・・・・

楽「し、しかし、敵は大軍ですよ？」

死「大丈夫大丈夫。百万以下なら一人でも行けるから。」

「「「・・・・・・・・」」」

あ、信じてないなその目は。

いいさいいさ。どうせ俺は存在そのものが信じられないような存在だし、化けもんだしアホだし不細工だし・・・・という感じで心の中でいじけてた別に不細工じゃないんだけど（作者）

楽「終天殿、各門の防柵が完成しました。」

死「もう出来たのか。」

楽「はい。ですが東門が少し・・・」

確かあっちに一番多くくるんだっけ。俺がいこうか。

俺と楽進が話していると、義勇軍の一人が報告しにきた。

兵「報告します。賊ではない軍がこちらに向かっています。おそらく陳留からの軍かと。」

陳留・・・・曹操か。

楽「分かった。すぐに迎え入れる準備を。私も行く」

そういって楽進は走っていった。

うむ、暇だ。東門見に行くか。

う～んこれなら別に問題ないだろう。楽進が不安そうに言っていたがこれなら十分だな。

楽「ここにいたんですか、終天殿。」

死「楽進か、ちょっと確認にな。で、どうした？」

楽「はい、これから作戦会議を行うので、終点殿の意見も聞きたいと。」

死「分かった。先に行っててくれ。」

楽「わかりました。」

楽進はさっさと戻っていった。

死「・・・・確認しとくか。」

俺は通信器の電源をいれ、

「おい天、そっちはどうなってる？」

「あ、リ～ダ～。こっちはいつでも撃てるよ～。」

「そっか、そんじゃあ切るからな。」

「うん。ばいば～い。」

プツッ

えーりんえーりんやりすぎて筋肉痛になったらどう思います？（後書き）

ああ～知識が抜けていく～。そうそう、これからテストがちかいの
でしばらく更新できないかもしれません

暴走したらもはや人外（前書き）

ああ、せっかく書いたのにキー押し間違えて全部キング・クリムゾンされてしまった。書くの時間かかったのにー。

暴走したらもはや人外

作者ェ・・・軍議をやってるところに入ると、水色っぽい髪の女性となんか変わった髪型の女の子がいた。夏侯淵と許？と言うらしい。自己紹介の場面は割愛する。それにしても曹操が直に来るとなると会う前に戦闘が終わったときにどうにかして逃げんとな。ちなみに配置は、西門が于禁と許？、北門は李典と夏侯淵で東門に俺と楽進だ。

まあ、そんなわけで今東門にいるんだが、

「楽進、明らかに報告より多いよな」

楽「た、たしかに」

何か苦笑いを浮かべている。ちょっと引き気味だな。まあ、かるく数千位を超えてるしな。

「まあいい、俺が突っ込む。その後ろからついてこい。」

楽「は、はい」

「いくぞ！」

おおおおおおおおーーーー

「あああああ！」

俺は賊の中に突っ込み、切り捨てていく。

「ぎゃあああ」

「化け物だあああ」

「かないこねえ、逃げろーーー！」

逃げる奴もいるが今回ばかりは逃がすわけにはいかない。
なぜなら、貴様らは餌なんだからなぁ！

ＳＩＤＥ楽進

私が彼とあったのは見回りをしてる時だった。
はじめは奴らの仲間だと思った。でも違ったときはかなり焦った。
でも謝ったら気にしてないと許してくれたので思わずホッとした。
それに顔には出さなかったが、実は顔を見たときにドキッとしたりした／／／。
そして、董卓の将らしい。その辺をフラフラしてて食料がなくなったからここによったといった。
私は、もうすぐここに賊がくることを伝えたら、一緒に戦ってくれると言ってくれた。正直助かった。できる限り戦力が欲しかったから。
そして、今に至るんだが圧倒的だった。彼が突っ込んだところから、賊が次々と吹き飛んでいた。
強い。ただそう思った。でもそのせいで少し隙ができてしまった。

「死ねえええええ！」

「な！？」

そしてもうだめだと思って目をつぶった。

ＳＩＤＥ死帰

おれは突っ込んでからしばらく敵を切り続けた。切って切って切って切って崩天画戟に血を吸わせ続けた。俺の武器は一部生きているようなものがある。そしてひたすら血を求める。

「キリないしそろそろあれ使うか？」
そう思って楽進に引くように言おうとしたら、後ろに剣を振りかぶる賊がいた。
「ちぃぃ！」
俺は思わず舌打ちをし、崩天画戟を投げつける。
「ぐぎゃああ！」
「楽進！」
「っ！終天殿！？」
「楽進！全員を連れて早く引け！こいつらを殲滅する！」
「わかりました、ご武運を。引くぞ！」
そう言ってみんな引いていった。
今この場にいるのは俺と黄巾党だけ。さて、
「おまえら、生きて帰れると思うなよおおおおおお。」
俺は自分と賊を囲むかのように結界を張り、
「消え去れ！」
腕を上から振り下ろし合図をする。そして辺が光で包まれ、意識が一時的に《・・・・》途切れた。

暴走したらもはや人外（後書き）

久々に書きました。つか、一回書いた文がキンクりを起こしてしまいものすごく辛かった。

我死なず　（前書き）

おひさです。今東方をしてますが、妹紅が倒せ～ないよ～あの弾幕何回やってもよけれないっといった感じであります。それではどぞ～。あ、あと短いです

我死なず

「げほっ・・・きっつ。」
今の俺の体は内臓が焼け焦げ、足が一本なくなっている。本来なら
これは確実に死ぬケガなのだが、もともと化け物である俺は死なな
い。でも痛覚はあるのでものすごく痛い。

「早く治さねえと気絶しそうだ・・・」

俺は、右腕についたガントレットのような機械を操作する。

――――――――ハーモナイザー起動――――――――

ブオオオォォォォ

彼の体が、青い光に包まれて、再生していく。

「っふ～、やっぱ便利だなこれ。さて戻ろうかってあれは曹操の旗・
・・会わないうちに帰るか。」

ぶっちゃけ会って俺がこんなことやったとかバレたら勧誘されそう
だし夏侯惇に切りかかられるのは遠慮願う。しかしどうやって洛陽
まで帰るかな?あ、ポータル使えばよかったんだ。俺ってアホだな
～、まあいいか。

「転送」

おれはポータルグレネードを起動し、洛陽に帰った。で、ポータル
を抜けたところは門の前の遥上空。

「嘘おおおおおおおお！？」

わざとらしく焦りながらもきっちり受身を取る。

ドスン！

「あぶね～危うくミンチになるかと思った。」

さて久々に恋に会いに行こうかな。

おまけ

あ～暇だ。いや、忙しいか？

おっす（「Д」）ノおら閃。わくわくすっぞ。

まあ、そんなネタはおいといて基地のメンテめんどくさ！？くそっほかの奴らはどうした！天は衛星砲の調整に行ったし、戒はＡＫと遊んでるし、０《ゼロ》は武器を磨いてるし、淵は寝てるし誰も手伝ってくれないし。ってか内２人遊んでんじゃねーーー！はあはあ疲れた。

「ん？なんだこれ。」

俺はパソコンの端末の中に何かのデータを見つけた。

「え～と、日記？誰のだ？」

いや、おそらく死帰のだろう。気になるし、誰も見てないから見てしまえ。

□月△日
ついにＡＫの創造に成功した。これまでイメージが不安定だったせいで成功しなかったがようやく実を結んだ。これによってオーバーＧを作り出せばＴ－ＥＮＧには困らないだろう。

Ｔ－ＥＮＧ？ああ、サーマルエナジーか。にしてもこんな昔から作ってたのか。

○月◆日
緊急事態が発生した。ＡＫの実験をしたのはいいが、その際トラブルによりＡＫのコアを体内に入れてしまった。これは予想以上に危ない状態だ。もう意識が薄れかけている。なんとか鎮静剤で沈めたが、これが暴走したらいったいどうなるのか考えたくもない。

そんなことがあったのか・・・よく見たらこれは俺たちが作られるよりも前のことだな。

×月×日
最近になって気づいた、俺は日に日に感情が薄れている。この前のトラブルのせいかわからないが今のままではなんとも言えない。一体何が起こっているんだ。

なんだこりゃあ・・・まさかこんなことを隠してたとはな。まだまだあの人のことはわからん事だらけだ・・・

夢に潜みし魔獣（前書き）

久々であります。ここ最近話が思いつかず放置状態でした。

夢に潜みし魔獣

ＳＩＤＥ死帰

「はぁ、はぁ、こりゃあきついな・・・」

グギャアアアアアアアア！

正宗を持ち、膝を付く俺の目の前にいるものが雄叫びを上げる。

「これが俺の中にいるとは到底思えんな。まあ、事実上居るけど、細胞が何らかの変化を起こしているとは思っていたがここまで進化していたか。」

やっぱりＡＫのコアが入ったのがトリガーになったんだろうな・・・

まさに混ぜるな危険だよ。

グオオォォォォォ・・・・

目の前の黒い死神はこちらを向き、戦闘態勢に入った。

「まだやる気か。」

こちらも構え直す。そして、ぶつかり合う瞬間風景が歪み始める。

「ここまでのようだな。」

そして視界がブラックアウトし、俺は夢から覚めた。

（また決着つかずか。早く決着を付けないと・・・）
俺は自分の右腕を見ると、それは人の肌の色ではなくひび割れた黒い腕になっていた。
「完全に意識を失って暴走か。」
そうなったらもう止まらない、全てを破壊するまで止まることはない。
大地を、

生き物を、

世界を、

何もかもを。

そうなれば于吉たちが出てくるだろうが、あいつらでは止められないだろう。

ドンドン

「死帰、ごはん。」

恋が呼びに来たようだ。俺は慌てて、腕に包帯を巻いて隠す。

ガチャ

「詠がご飯出来たから読んできてって。」

「分かった、今行く。」

「死帰、どうしたのその腕？」

「この前の旅で少しな。」

「そう。」

ビキ！

「ウグッ！？」

あまりの痛みに腕を抑えうずくまる。

「！・・・大丈夫？」

恋が駆け寄ってくる。

（日に日に強くなってるな、これじゃあいつまで持つか・・・）

「・・・ああ、大丈夫だ。」

ほんとは大丈夫じゃない。常人なら気絶してもおかしくないほどの痛みがずっと右腕に走っている。

「最近死帰、様子がおかしい。」

「そうか？いつも通りだろ。」

「嘘・・・とてもそうは見えない。」

もう隠すのは難しいな。

「今度話すよ、ほら飯が冷めちまう、早く行くぞ。」

「うん、でも後でちゃんと話して。」

「分かった。」

黄巾の乱は近い。それまでに暴走は絶対に食い止めなければいけないな。そんなことで仲間を失うなんて冗談じゃない。

だからはやく、

奴を止める！

夢に潜みし魔獣（後書き）

中途半端&駄文ですみません。

ＡＫ：カオス

死帰の中に潜んでいる魔獣であり、死帰の細胞でもある。

形状は、黒ハンニバルの背中に甲殻のような羽が生え、尻尾が大鎌になっている。

死帰と同じ力を持ち、まだ制御できていない力も使う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7953s/

チートがログインしました

2011年7月12日08時09分発行